

# 中津市における医学に関する歴史的社会的資源の活用 のためのシニア観光ボランティア活動

難波利光  
(周南公立大学 教授)

はじめに

- 観光ボランティアの必要性
  - 自発的ボランティアの公共性
  - シニア観光ボランティアの役割
  - サーバント・リーダーシップによる組織形成
- 中津市観光ボランティア活動分析
  - 中津市の歴史的社会的資源
  - 中津市の観光ボランティア活動内容

おわりに

年報 35 号

---

発行 令和6(2024)年3月  
発行人 頼原 健(理事長)  
編集責任者 瓜生 達哉(事務局長)  
発行所 一般財団法人 山口老年総合研究所  
〒751-0833 下関市武久町二丁目53番8号 武久病院内  
TEL: 083-252-2124 (代表)  
URL: <http://www.tip.ne.jp/rounenkenkyu/>  
印刷所 泉菊印刷株式会社  
〒752-0927 下関市長府扇町8番48号  
TEL: 083-248-3553 (代表)

---

年報 35 (抄録)

2024年3月 発行

一般財団法人 山口老年総合研究所

本論文および年報35掲載の論文は、本研究所ホームページ  
<http://www.tip.ne.jp/rounenkenkyu/nenpou/>からPDF媒体によるダウンロードが可能です。

# 中津市における医学に関する歴史的社会的資源の活用 のためのシニア観光ボランティア活動

難波利光

(周南公立大学 教授)

はじめに

- 1 観光ボランティアの必要性
  - 1-1 自発的ボランティアの公共性
  - 1-2 シニア観光ボランティアの役割
  - 1-3 サーバント・リーダーシップによる組織形成
- 2 中津市観光ボランティア活動分析
  - 2-1 中津市の歴史的社会的資源
  - 2-2 中津市の観光ボランティア活動内容

おわりに

はじめに

地方の地域経済に対する早急な対策が求められている。超少子高齢社会や人口減少が加速度的に進み、将来的に地域経済を持続的に維持させることが困難になりつつある。そこで、地方を支える人たちの育成と発掘は、緊急の課題である。

中央政府は、女性の活躍を推進させ、労働人口を増やし、女性の所得向上の政策を推進している。そのためには、企業の働き方に対する意識改革が求められ、女性の働く環境の改善に取り組まなければならない。それと同時に、高齢者就労のあり方も改善しなければならない。地方における地域経済を支えていく人材は、女性と高齢者に求められているといえる。特に、高齢女性の人口構成は増加傾向にあり高齢女性の活躍も重要な課題である。

これからの地方の主たる産業として考えられるのは、医療・福祉関連産業、情報産業、観光産業が考えられる。高齢化に伴い医療・福祉関連産業が伸びることは必然である。情報産業は、労働人口が減少する中で、労働生産性を高めサービス供給を維持するために必要である。観光産業は、地方への人の流れを作ることが可能であると考えられる。場合によれば、これら3つの産業は、個別ではなく融合されて成長することも考えられる。

高齢者人口は、2040年問題といわれるように全国的には減少傾向になる。地方は、既に減少している地域もあり、高齢者が地域の賃金労働力として担う必要性は高まっている。元気な高齢者による定年後の賃金労働機会が増加している。高齢者の賃金労働は、高齢者の健康維持にも役立てることができ、賃金労働の人手不足課題解消と合わせて地域課題の解決になっている。

この様に、高齢者の地方経済への貢献は、好循環になっているといえる。その反面、地域社会を支えるボランティアに影響を及ぼしている。直面している課題は、高齢者のボランティア不足である。賃金労働機会が増えたことにより、定年後にボランティア参加を考えていた高齢者が参加を控えるようになったのである。地域社会を支えるために必要なボランティアは、地方にとって必要な要素である。高齢者の生活面においては、一人暮らしの高齢者が増加し家族によるサポートがないなかで、高齢者同士が支え合う構造は不可欠である。また、地方の賃金を伴わない地域活動による地域貢献を高齢者が担うことにより、地域サービスの需要を保つことができる。

本研究の対象は、大分県中津市である。中津市は、歴史的観光資源が多く観光客の誘客の可能性が高い。しかし、観光産業として民間事業が本格的に参入はされていない。また、中津市は、これまで観光都市として取り組んできておらず、地域住民の観光に対する意識が高いとはいえない。このような地方都市は、全国的にも多い。自治体が、観光客の受入体制の整っていない地域に対して、交流人口や関係人口施策をたてることで地域活性化を促そうとするためには、観光客との関わりを民間企業に委ねるのではなく、地域住民により支える仕組みに頼ることが合理的である。それは、地域資源に精通しているからこそ観光客に伝えることができるコンテンツを認識しているからである。特に、定年を迎えた高齢者による観光ボランティアによるガイドの必要性は高いといえる。

本研究では、観光ボランティアの必要性について言及し、それに伴う大分県中津市のシニア観光ボランティアの活動の可能性について考察をおこなう。

## 1 観光ボランティアの必要性

### 1-1 自発的ボランティアの公共性

ボランティアを考える視点として、ボランティアの公共性についてみておく。ボランティアは、営利を目的とせず自発的に行うことと最低限定義づけることができる。ボランティア活動とは、そのボランティアの行動を地域社会のために役立てることを指す。また、社会的活動を行う内容の選択肢として金銭的報酬を求める場合と求めない場合がある。その場合のボランティア活動は、有償ボランティア<sup>1</sup>と無償ボランティアに分類される。有償ボランティアは、賃金労働と異なり最低賃金を守る必要がなく、ボランティア活動を行う際に、自らの資金を持ち出すことがなく活動を行うための資金を受け取ることができる。以前は、ボランティア活動といえば無償が多かったが、今日では、有償での活動を基本とする考えも増えてきている。この様に、ボランティア活動は、自らの判断で地域社会への貢献を意図として取り組んでいる。

ボランティア活動は、個人として取り組むものもあるが、グループや組織を基盤として取り組むものが多くみられる。たとえ個人として取り組んでいても、活動の継続により目的を共有し多くの人たちと共に取り組むことになることもある。

ボランティア活動を行っている間に、自己の達成感や満足感を高めることができたり、自身の生活の質を向上させたり、能力の向上に役立つなど、個人の価値や成長に繋がることにもなる。また、ボランティア活動により不特定の人やボランティアを目的とした人に対する私的や公的なサービス提供

が行われている。すなわち、ボランティア活動は、個人と公共のどちらにも影響を及ぼすことができると考えられる。その結果、社会的影響としては、ソーシャル・キャピタルを作ることができることもある。この社会関係資本は、ボランティアによる人的資源を地域社会に活かす上で有益である。

この様な視点から、ボランティア活動は、個人としての活動を地域社会のためという名目で、公共的な役割を果たす機能になっている。この機能は、アリエール・ヒルマンによるボランティア型公共財の理論で説明することができる。それは、個人が個人の利得となるために自発的に行動したことが、公的な役割として他の人の便益になるからである。また、ボランティア活動は、多くの人がしなければいけないものではなく、個人の思いで、少人数で行うことで十分に他者への便益になり得る。ボランティア活動を行いたいと思って行動したことにより、他者はフリーライドすることができる。すなわち、ボランティア活動は、ボランティアを行いたいと思った個人が行動することが重要であり、自主性を持たない多くの人が行う必要はないのである。

ヒルマンによるボランティア型公共財の考え方によると、公共財を提供しなければならない社会資源に対して、ボランティアが個人的な供給により提供されるなら、公共財としての提供の必要がなくなり財政支出を抑制できると考えることができる。また、ボランティアは、自分の利益のために自らが費用負担をし、公共財を供給していることになる。それ故、本人の意思とは関係なく他の人に利益を与えていることになる。あくまでもボランティアは、他者を喜ばせるものとして行うのではなく、個人的便益がボランティアを行うことにより助けることができるという個人的費用を上回るから行う行動と捉えることができる。また、個人のボランティアをしたいという行動は、他者が自分の代わりにしてくれると助かると望むものではない。すなわち、自発的に行うボランティアは、個人の便益を優先して取り組んでいることによる満足とボランティアを行うことによる公的な支出を抑制し他者の便益を高めることができるという個人と他者にとって有益であると考えられる。

## 1-2 シニア観光ボランティアの役割

ボランティア型公共財で供給されるボランティアは、本来、行政により提供され施策に盛り込まれているサービスである。地方都市において地域経済を活性化させるための主たる産業は、医療・福祉関連産業、情報産業、観光産業といわれている。これらの産業は、超少子高齢社会により加速度的に変化する経済・社会において成長を牽引すると思われる。地方都市における誰でも参加することのできる参加障壁の低い産業が観光産業である。それ故、多くの地方政府は、観光施策に関する産業の育成や人材育成に力を入れ波及効果を期待している。

観光施策に投じる人材を育成するにあたり、地方都市で増加している高齢者の活用は欠かせない。高齢者に対しては、医療福祉分野からは、医療費や介護費用の増加で財政を圧迫する要因として捉えられているため、高齢者に対する費用を軽減するためフレイル対策強化が行われている。そこで、地方政府は、高齢者の健康寿命を延ばすために、高齢者の社会進出を促進させ健康寿命を延ばす施策に取り組んでいる。

高齢者の活動としては、就労、ボランティア活動、趣味が考えられる。これらの活動は、地域社会

への影響を与えることも多くあるが、老老介護のように家庭内事情で社会的活動が抑制される場合もある。また、前節で述べた有償ボランティアについては、高齢者の中に有償であることへの拒否反応も強く、無償でなければ活動をしたくないという意見の人もみうけられる。多様化する価値観によりボランティアへの取り組み方も変化し、活動の枠組みを多くもつことも必要になっている。活動の枠組みには、人に関わり活動、自然・環境に関する活動、社会に関する活動などがある。高齢者は、これまでの経歴によりどの活動に取り組むかを決めていく。従って、地域社会が期待する高齢者に対するボランティアは、地域のニーズにあったボランティア活動が、その地域に住む高齢者のタイプと不一致になる可能性もある。

観光産業を支えていくために民間企業で雇用された人たちが地域経済を支えていくわけであるが、それだけで地域の観光を支えていくことは難しい。今日の観光は、地域に根ざした着地型観光が主流となり、地域の生活や文化に根ざしたサービス提供が求められている。さらに、地域住民と観光客を繋ぐためのファシリテーターが必要である。これまで観光地でなかった地域を観光地化させることは、地域住民にとって観光客は不経済の存在として感じてしまう。地域住民の生活文化を伝えたい反面、観光客へのホスピタリティを満たすことが難しいのである。

そこで、その役割を担うことができるのがシニア観光ボランティアである。シニアのボランティアは、自身が社会の役に立つ、自分の存在感を高めるなどのシニアとしての自己実現の場所や機会を求めている。その場所が、地方都市で求められている住民と観光客を繋げる場であれば、自己の利益だけでなく、他者に対する利益にも繋がることにもなるのである。しかし、地域社会への貢献を意識しながらボランティア活動を行っている者ばかりではない。まさに、ボランティア型公共財となり得ることがシニア観光ボランティアには秘められている。

シニア観光ボランティアは、地方行政との連携で活動の幅を広げることも多いことが、ボランティア型公共財になる要因になっている。地方行政が取り組む観光ガイドの一員としての役割は、行政として、高齢者の健康促進と生きがい作りという視点からも有意義であると捉えている。高齢者個人が観光ボランティアに組みたいと思う気持ちは、個人を活かす社会づくりの1つとして観光ボランティアの人材育成を行う対象になり得ている。観光ボランティアを行うためには、観光に繋がる地域資源に関する知識を増やすだけでなく、観光客に寄り添いながら地域の魅力を発信する能力が伴わなければならない。

個人的な活動としてのボランティアから地域的な活動を行うボランティアに意識が変化することで、個人的活動から組織的な活動へ対応できる能力が必要になる。その折、個人が組織の一員としての役割を意識するようになる。組織としての役割には様々な仕事があるが、中でも組織を纏め牽引する役割は重要である。ボランティア組織は、上下関係のあるヒエラルキー社会ではなくフラットな関係性が基本である。会社組織のような指揮命令系統がない組織である。この点において職場経験とは違う組織形態であることに戸惑う人たちも多い。そこで、次の節で、ボランティア組織形態のあり方について言及する。

### 1-3 サーバント・リーダーシップによる組織形成

観光ボランティア活動を行う上で重要なことは、参加する人たちの特性にあった役割を担うことである。これは、観光ボランティアだけに限られたことではないが、特に観光に関しては、活動地域の生活や文化を十分に理解していない観光客に接することから特に注視しなければならない。観光客は、自らの生活してきた環境の価値観で判断することが多い。地域的な価値観の偏在を意識しながら観光を楽しむことが求められることから観光リテラシーに関する教育も必要になっていく。

そこで、観光ボランティア活動では、活動に参加している人たちの能力や経験を把握した上で観光客への接し方を工夫する必要がある。観光客に利己的な価値で接することは、人間関係を形成することができず、一方的なサービスを提供することになる。この様なサービスの提供が起らないようにするために、組織を束ねるリーダーの存在が必要である。そのためのリーダーのあり方として、サーバント・リーダーシップ<sup>ii</sup>が適切であると考えられる。

ロバート・K・グリーンリーフによれば、サーバント・リーダーシップは、「一見、リーダーっぽくない、むしろその対極にあるように思われるサーバントこそが、実現を望む社会的なミッションを奉仕の名のもとに掲げ、自分についてくる人（フォロワー）たちに尽くす。それがサーバント・リーダーの姿だ。リーダーとフォロワーの間に、このような関係が成立するときに、存在する社会現象をサーバント・リーダーシップと呼ぶ。」と記している。また、真田茂人は、サーバント・リーダーシップの5つのバリューとして、①個人を尊重する、②導く、③サバする、④人の持てる力を引き出す、⑤個人の成長へと繋げるとしている。また、サーバント・リーダーシップの特徴として、①傾聴、②共感、③癒し、④気づき、⑤納得、⑥概念化、⑦先見力・予見力、⑧執事役、⑨人々の成長に関わる、⑩コミュニティ創りを挙げている。10の内容について具体的にみると、①傾聴「相手が望んでいること聞き、どうすれば役に立てるのかを考える。」、②共感「相手の立場に立って相手の気持ちを理解する。」、③癒し「相手の心を無傷の状態にして、未来の力を取り戻させる。」、④気づき「鋭敏な知覚により、物事をありのままに見る。」、⑤納得「権限に依らず、服従を強要しない。相手に納得を促すことができる。」、⑥概念化「大きな夢やビジョナリーなコンセプトを持つ。日常業務を越えた志の高いイメージを持つ。」、⑦先見力・予見力「現在と過去の出来事を照らし合わせ、そこから将来を予想する。」、⑧執事役「自分の利益よりも相手の利益を考えて行動できる。」、⑨人々の成長に関わる「仲間の成長を促すことを深くコミットしている。一人ひとりが秘めている力や価値に気づいている。」、⑩コミュニティ創り「人々が大きく成長できるコミュニティを創り出す。」である。

この様なサーバント・リーダーシップの要素は、観光ボランティア組織を形成する際にも重要であるといえる。観光ボランティアに携わりたい人たちは、活動の目的が様々である。特に高齢者は、個人の学びとしてご当地の知識を深めたいという探究心により関心を持つ人も多い。シニア観光ボランティアとして実際に観光客に説明を行う際に、知識を持つことだけで観光客に対応できるかという十分に地域の魅力を伝えることが難しいと思われる。この様な場合にも観光ボランティアのリーダーとして、サーバント・リーダーシップを発揮しなければいけない。個人としての活動目的と観光客へのアテンドを行うことの能力の整合をとる必要がある。観光ボランティアガイド一人一人の意欲を削

ぐことなく、観光客への対応能力を高めることができるように、適切な指導をしなければならない。これは、従来型のトップダウンでのリーダーシップでは対応できないのである。あくまでも自発的なボランティア活動を観光という公共性のあるサービスに役立てているという仕組みであることから、個人の目的を尊重する必要があるからである。個人の目的を活かしながら公共性のある観光ボランティアを実施することは、サーバント・リーダーシップの特徴を活かすことのできる人材が必要であるといえる。

## 2 中津市観光ボランティア活動分析

ここまで述べてきた観光ボランティアの必要性をもとに、大分県中津市のシニア観光ボランティアの活動の可能性について考察をおこなう。ここで取り上げる活動は、2つの観光ボランティア団体が、中津市の歴史的な社会資源を活用して実践を行っている。そこでまず、中津市の歴史的な社会資源について整理する。特に、中津市の歴史的な特徴である医学的観光資源を取り上げる。次に2つの観光ボランティア団体が取り組んでいる観光コースの事例を紹介する。

### 2-1 中津市の歴史的な社会資源

#### 1) 中津市の観光資源

中津市は、歴史的資源を多く有している。その年代も幅広く、古代、中世、近世、近現代にまで至る。これらの歴史的資源は、中津市教育委員会が作成する小学社会科学習教材にも掲載されている。具体的に掲載されている歴史的な社会資源を明記する。古代には、枌洞穴、法垣遺跡、上ノ原横穴墓群、相原山首遺跡、沖代地区条里跡、長者屋敷官街遺跡、薦神社、大井手堰がある。中世には、羅漢寺・古羅漢、長岩城址がある。近世には、中津城、おかこい山、御水道、生田門、寺町、自性寺、織部灯笼籠、日田往還中津街道、荒瀬井路開発物語、青の洞門、草本金山跡がある。近現代には、福沢旧居、福澤記念館、汐湯中津紡績、神戸製鋼中津工場、八面山平和公園、耶馬溪橋、馬溪橋、耶馬溪鉄道がある。これだけ多くの観光資源があるが、中津駅周辺と耶馬溪地区が主たる観光地になっている。耶馬溪地区への公共交通機関がなく、車を使用しての観光になる。従って、中津駅周辺は、JRを活用し、中津駅前から自転車や徒歩での観光が可能である。この点から、2つの地域は、観光客の志向も異なっている。

#### 2) 医学に関する歴史的な観光社会資源

前掲の中津市教育委員会作成の教材には、教育者の項目も特記されている。中津市の代表的な教育の歴史的な人物は、福澤諭吉である。また、中津城を築いた黒田官兵衛も歴史ドラマの影響から有名になっている。他にも中津市からは偉大な歴史的な人物が輩出されている。本研究では、特に医学に関する人物<sup>iii</sup>を掲載する。その人物は、前野良沢<sup>iv</sup>、田中信平、辛島正庵、村上玄水、村上姑南、村上田長、大江雲澤、小幡英之助、田原淳である。

中津市の小学校でも学ぶ、これらの人物について簡単に述べる。中津市教育委員会が作成した『ふ



るさと中津』に掲載されている内容を以下明記する。前野良沢は、江戸中期の蘭学者であり中津藩医<sup>v</sup>である。有名な書籍としては、杉田玄白らと「ターヘル・アナトミア」の翻訳を行い、「解体新書」を発行した。田中信平は、江戸後期の町医で、日本最初の本格的な中国料理の解説書である「卓子式」を出版した。辛島正庵は、江戸後期中津藩医で天然痘の予防接種である種痘の研究を行った。村上玄水は、中津藩医であり、「解臍記」や「解剖図」に解剖記録を残した。村上姑南は、江戸末期から明治期の医者で疱瘡の治療に尽くした。村上田長は、明治期の医者で、県内初の「田舎新聞」を創刊した。大江雲澤は、江戸末期から明治期の医者で、中津医学校設立に尽力した。小幡英之助は、明治期の歯科医で、日本の歯科医師免許第1号を取得した。田原淳は、心臓のペースメーカーなどの基礎研究をしている。

これらの人物の歴史は、三津同盟が組まれた根拠になっている。三津同盟は、2021年11月 18日、津山洋学資料館で、大分県中津市、鳥根県津和野町、岡山県津山市が「蘭学・洋学・三津同盟」として締結された。三市町には、江戸後期から明治初期にかけ、共に優れた蘭学者・洋学者を輩出した歴史的背景がある。中津市では、『解体新書』の翻訳を主導した前野良沢が有名である。医師の旧宅を活用した村上・大江医家史料館などがある。津和野町には、幕末にオランダ留学した哲学者で官僚の西周や陸軍軍医で小説家の森鷗外などがいて、国史跡の西周旧居や森鷗外記念館などがある。津山市には、津山藩医で蘭学研究をした宇田川家三代が有名である。同じ「津」の字で繋がり、共通の歴史的背景を持つ三市町が、相互に連携・協力して地域活性化に繋げるものである。<sup>vi</sup>

## 2-2 中津市の観光ボランティア活動内容

本稿で取り上げる中津市における観光ボランティア団体は、「中津の歴史と文化を学ぶ会」と「中津の郷土史を語る会」の2つである。これらの団体には、令和4年度に合計46名が所属しており60歳未満は3名であることからシニアが中心の団体である。男女数は、男性32名、女性14名である。平成30年度～令和4年度までの中津の歴史と文化を学ぶ会と中津の郷土史を語る会の活動実績を表1で示す。平成30年度と令和1年度の活動は活発であったが、令和2年度以降、コロナの影響があり急激に減少した。どちらの団体も平成30年度と令和1年度の動向をみて、その役割は大きいといえる。

表1 中津の歴史と文化を学ぶ会と中津の郷土史を語る会の活動実績（平成30年度～令和4年度）

		平成30年度	令和1年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
予約件数	語る会	53	51	9	24	33
	学ぶ会	58	58	8	17	29
来客数	語る会	1,336	1,394	139	738	971
	学ぶ会	1,204	1,038	56	258	656
ガイド者数	語る会	99	103	13	53	74
	学ぶ会	85	79	9	22	52

出典) 中津の歴史と文化を学ぶ会と中津の郷土史を語る会の活動実績資料より筆者作成

次に、表2で中津の歴史と文化を学ぶ会の平成30年度観光ガイド目的地パターン表と表3で中津の郷土史を語る会の平成30年度観光ガイド目的地パターン表を示す。表2と表3は、平成30年度の観光ガイドで団体ごとの観光客の観光目的により組まれた同じプランの重複を筆者が削除し纏めたものである。

**表2 中津の歴史と文化を学ぶ会の平成30年度観光ガイド目的地パターン表**

福沢諭吉旧居・福沢諭吉記念館
中津城
中津城・福沢邸記念館・生田門・寺町
黒田官兵衛史料館
城下町(中津城には行かない)・寺町・歴史資料館・大江医家史料館
中津城・寺町・福沢諭吉旧居
村上医家資料館・自性寺・弓場染め物店・中津城・福沢諭吉旧居・福沢諭吉記念館・大江医家資料館・寺町通り・寺院
福沢諭吉旧居・中津城
中津城・福沢諭吉旧居・合元寺・寺町
中津城・黒田官兵衛史料館
中津城・石垣・黒田官兵衛資料館
中津城・福沢諭吉旧居・合元寺
自性寺・村上医家資料館
中津城・黒田官兵衛史料館・福沢諭吉旧居
中津城・福沢諭吉旧居・寺町
中津城・合元寺・福沢諭吉旧居
中津城・石垣・中津公園内
沖代条理・長者屋敷・薦神社
中津城・姫路町・福沢諭吉旧居
中津城・石垣
瑠璃宋・寺町・合元寺・中津城石垣・奥平家資料館
日の出町・諸町ひな祭り会場と周辺の歴史
中津城・石垣・黒田官兵衛資料館・合元寺

出典) 中津の歴史と文化を学ぶ会の活動実績資料より筆者作成

表3 中津の郷土史を語る会の平成30年度観光ガイド目的地パターン表

中津城・桜観賞
中津城・福沢記念館・合元寺
中津城・福沢諭吉旧居
福沢諭吉旧居・福沢諭吉記念館・中津城・大江医家資料館・木村美術館・寺町・諸町・豊後街道
中津城・福沢諭吉旧居・合元寺
中津城・福沢諭吉旧居・寺町
福沢諭吉旧居
合元寺・福沢諭吉旧居
福沢旧居・大江医家資料館・小幡英之助・中津城
中津城・合元寺
中津城・寺町周辺・長久寺・正行寺
中津城石垣・周辺
鶴市神社・相原廃寺
福沢諭吉記念館
中津城・福沢諭吉旧居・寺町・合元寺
中津城・福沢諭吉旧居・諸町ひな祭り会場・中津城
中津城

出典) 中津の郷土史を語る会の活動実績資料より筆者作成

表2と表3をみると、中津城・福澤諭吉旧居・福澤諭吉記念館・黒田官兵衛史料館のように観光地のシンボルとして保存された建物や資料保存のために作られた建造物が観光の中心になっている。他にその周辺にある合元寺・自性寺・長久寺・正行寺などといった寺院を巡っている。街並みとしては、寺町・日の出町などである。医学に関する歴史的観光目的は、村上医家資料館・大江医家史料館・小幡英之助などで非常に限られている。中津市は、三津同盟が組まれるように医学の歴史的な社会資源が存在する場所であることを観光の1つとして役立てることができる。観光といえば、建物見学や資料館見学が中心になるが、歴史的な人物の学びを全体的にできる場を設けることも必要であると思われる。

### おわりに

本稿では、中津市観光ボランティアを事例に挙げ観光ボランティアの必要性について言及した。中津市の2つの観光ボランティアガイド団体は、中津市への歴史的な関心から加入した人も多いが、観光客との交流を楽しみにしている人も多い。観光ボランティアが知識を増やすことだけに専念したい場合は、自発的ボランティアによる公共性への影響は少なく地域経済への波及効果を見込むことは難しい。しかし、高齢者が活躍している観光ボランティアは、自発的なボランティア活動であるが故に

自己の満足感を高めることができている。高齢者の自己満足感向上は、自身の健康を自らの意思で高めることができるため健康管理ができ、高騰している自治体の高齢者に対する医療・介護関連費用の軽減効果に貢献している。この効果は、多くの自治体でも期待されている。従って、シニア観光ボランティアと高齢者の健康については今後の研究課題として重要である。

高齢者を活用した観光と健康との関係性に視点をおきながら、中津市のシニア観光ボランティア団体が、中津市の観光に今後どの様に寄与すべきかについて述べる。中津市の最大の観光社会資源は、中津市から輩出された多くの医学に関する歴史的資源である。この観光社会資源を活かし、交流人口や関係人口を増やしていくためには、健康に着目した観光プランを作ることが必要である。昨今、交流人口や関係人口は、自治体の人口問題を解決する上で注目されている。しかし、交流人口や関係人口施策に自治体に取り組んでも、継続的な地元住民と観光客との関係性を深めることが難しく、一時的な施策に止まっていることが多い。健康に着目した交流人口や関係人口施策は、中津市の医療歴史の知識の増大と、観光という体を動かすことによる身体的満足との融合により観光客の興味を誘因する。観光客は、歴史を通じた医学的な知識を実際に健康増進に役立てる機会の場を得ることになる。

2つのシニア観光ボランティア団体を活用することはソーシャル・キャピタルの面からも外すことはできない。団体メンバーの中でも、歴史学習にだけ関心のある人と観光ガイドに関心のある人がいる。自発的ボランティアの公共性の観点からみると、歴史学習にだけ関心のある人が、観光客との交流を行うことができると行政的には有益である。そこで、歴史学習に関心のある人に対して、自身の健康を増進するために自発的に観光客と共に学習し、観光に同行する役割を持たせることができれば良いと考える。多くの観光客を対象に観光ガイドができなくても個人的な関係ができれば会話を楽しむこともできると思われる。この様な采配ができる人材は、観光ガイドに関心のある人の中からサーバント・リーダーとしての素養をもつ人である。観光に関心のある団体は、その中から適した人がサーバント・リーダーシップの5つのバリューを活かすことで、地域経済への波及効果を高くする役割を担えると思われる。

中津市は、地方都市としてこれまでの取り組みのままで人口や生活面を維持することが難しいと思われる。その対応として、社会の変化に合わせた地域社会の形成が必要である。その焦点になるのが高齢者である。これまでと同じような高齢者の地域社会との関わりでは、変化に対応することができない。しかし、新たに今までと違う文化を移入することで、地域社会を崩壊させることを避けることができる。そこで、これまでの歴史社会資源を活用しつつ高齢者が自発的に生き生きと生活する社会を作り出すことが、中津市の持続可能性には必要であるといえる。

中津市は、歴史的な観光社会資源が豊富なものの、その活用は限定的な資源に集中し幅広い活用が乏しいといえる。観光客に、地元の小学生が学ぶ範囲での関心を抱かせる観光社会資源を少なくとも提供することが必要であると思われる。観光客により深い学習を促し、中津市に対する関心を高めることができるからである。地元住民と観光客の交流の架け橋として、2つのシニア観光ボランティア団体は、医学に関する歴史的観光資源を活用しながら、更なる観光コンテンツ活用の見直しを行うことでその役割が高まると考えられる。

- 
- <sup>i</sup> 有償ボランティアについての研究は、安立清史による『ボランティアと有償ボランティア』弦書房 2023に詳しい。
- <sup>ii</sup> サーバント・リーダーシップについては、ジェームスハンター著 石田量訳『サーバントリーダーシップ』PHP研究所 2004や高橋佳哉・村上力『サーバント リーダーシップ論』宝島社 2004に詳しい。
- <sup>iii</sup> 中津の医学史を総括すると根底部分には、奥平昌鹿・昌高の蘭学への理解がある。
- <sup>iv</sup> 前野良沢が1771年に蘭学『ターヘルアナム』を杉田玄白・中川淳庵とともに解説し始めたのが、中津藩奥平家の中屋敷内前野良沢邸である。
- <sup>v</sup> 豊前中津は医学研究に決して適した地ではなかったが、中津藩は18世紀中頃から学問の近代化に取り組み蘭学の発展に力を注いだことから歴史的な先人を生むことになる。
- <sup>vi</sup> 津山洋学資料館『洋学資料館』No.29 2022に掲載されている内容である。
- <sup>vii</sup> 関係人口についての研究は、田中輝美による『関係人口の社会学 人口減少時代の地域再生』大阪大学出版会2021や同著『関係人口をつくる定住でも交流でもないローカルイノベーション』木楽舎 2017に詳しい。

## 参考文献

- アリエ・L・ヒルマン著 井堀利宏監訳者『入門財政・公共政策 政府の責任と限界』勁草書房 2006
- 片桐一男編者『日蘭交流史 その人・物・情報』川島真人「中津医学校と中津藩蘭学」思文閣出版 2002
- 川島真人『蘭学の泉 こころに湧く-豊前・中津医学史散歩-』1992
- 川島真人『医は不仁の術 努めて仁をなさんと欲す』西日本臨床医学研究所 1996
- 川島真人『水滴は岩をも穿つ』梓書院 2006
- 真田茂人『サーバント・リーダーシップ実践講座』中央経済社 2012
- 藤原佳典・倉岡正高編著『シニアボランティアハンドブック シニアの力を引き出し活かす知識と技術』大修館書店 2016
- 労働政策研究・研修機構「高齢者の社会貢献活動に関する研究-定量的分析と定性的分析から-」  
労働政策研究・研修機構 労働政策研究報告書 No.142 2012
- ロバート・K・グリーンリーフ著 金井壽宏監訳者 金井真弓訳『サーバントリーダーシップ』  
英治出版株式会社 2008

## 参考資料

- 津山洋学資料館『洋学資料館』No.29 2022
- 中津市教育委員会「ふるさと学習教材」作成委員会 『ふるさと中津』小学校社会科学習教材  
なかつ学びびっく（子ども中津検定）公式ガイドブック 中津市教育委員会 2020
- 中津の郷土史を語る会観光ガイド活動記録資料 平成30年度～令和4年度
- 中津の歴史と文化を学ぶ会観光ガイド活動記録資料 平成30年度～令和4年度

